● 読書感想文コンクール　中学生の部 ●

図書館賞

後藤　葉乃（ごとう　はの）楢原中 2 年生

作品名:「きみの友だち」を読んで

図書:きみの友だち

この本は、中学校に入学した際に祖父からプレゼントしてもらったものでした。しかし、なかなか手に取る機会がないまま一年が過ぎようとした時に、学校が長い休校になりました。この機会に一度読んでみよう！と思って手に取りました。読み始めると、なんでもっと早く読まなかったんだろうと思うほど、心に染みる作品でした。背表紙に「友だち」の本当の意味をさがす連作長編と書いてあったのが納得いき、私も「友だち」とは何だろう？と「わたしの友だち」について考えさせられる一冊になりました。

この物語は八人の「きみ」が登場し、みんな友だちに関係する悩みを持っているお話です。足の不自由な恵美ちゃんと、病気がちな由香ちゃん、優秀な転校生に嫉妬する人気者のブンちゃん。笑いを取るのがうまい八方美人な堀田ちゃん。親友に都合よく扱われていくハナちゃん。いろいろな性格の「きみ」の友だち関係が描かれています。その中でも恵美と由香が物語の中心となって話が進んでいきます。主人公の恵美は小学五年生の時、交通事故で松葉杖なしでは歩けない状態になってしまいました。事故を友だちのせいにし、暴言を吐いたので友だちが誰一人としていなくなってしまいました。そんな時、恵美が唯一話すようになったのが腎臓の病気であまり学校には来れない由香です。周りの人達は似た者同士だと言っていますが、初めは自分とあまりにも違う性格なのできつくあたっていました。しかし、だんだん由香の優しさに触れ、彼女こそが本当の友だちだと気付き、二人は強くて固い友情を築きあげます。

「わたしは『みんな』って嫌いだから。『みんな』が『みんな』でいるうちは、友だちじゃない、絶対に」と言った言葉に私はハッとしました。私は「みんな」で群れることは苦手だけれど、自分だけ違うことをしたり、選んだりすることがなかなか出来ない人です。だから、「みんな」と一緒だということに安心して極力目立たないようにしていました。でも、恵美の言葉を聞いて「みんな」に流されないように

自分の意見をしっかり持って、行動する事が大切なんだと気付かされました。「みんな」と一緒は楽だし、安心するけど本当の自分ではないからです。恵美のように自分の意志を貫く強さも時には必要なのかと思いました。また、恵美はぶっきらぼうで素っけないような言い方をするけれど、実は誰よりも思いやりがあって温かい心の持ち主です。自分から他の友だちに加わろうとはしなかったけれど、友人関係に疲れたり、はじき出されて一人ぼっちになってしまった子に声をかける優しい子でした。恵美は本当に強くて優しい女の子。私もそんな人になりたいです。

　もう一つ、心に残ったところがあります。由香がクラスメイトからいつも恵美と二人だけで寂しくないか、友だちがたくさんいた方が楽しいと思わないかと聞かれたところです。由香は

「思うけど、わたし、恵美ちゃんとたくさん一緒にいる方がいい。」

と答えました。また、別の日には恵美がクラスメイトから由香が休みの時に寂しくないかと聞かれて、

「わたしは、一緒にいなくても寂しくない相手のこと、友だちって思うけど。」

と言い切ったところです。お互い通じ合うものがあり、そこには絆がありました。友だちが多いから良いという事ではなくて、恵美も由香もたった一人でも大切にしたい友だちがいれば十分で、自分を求めてくれる友だちが一人でもいればいいと思っているのです。それは決して寂しくなんかなくて、二人でいる事が本望で幸せな事なのです。

　私は「きみの友だち」を読んで、「わたしの友だち」とは何だろう、「わたしの友だち」は誰のことかなと考えるきっかけになりました。友だちはやっぱりかけがえのない存在で損得抜きでお互いのことを思って行動ができる相手のことだと思います。この本で友情の素晴らしさに改めて気付くことが出来ました。友だちは多くいる必要はなく、分かり合える人を大切にしていきたいです。そして、私自身は、恵美のように周りの目を気にしたりせず、本当の自分の意見が言えるようになりたいです。それで本当の自分を知ってもらいたいです。強くて優しい心の持ち主の恵美は私にとって憧れの存在になりました。